

**取組実績の概要** 【2ページ以内】**◆学生および教職員の相互派遣**

学生派遣については、事業2年目からの4年間に北海道大学、酪農学園大学および東京大学から毎年それぞれ10、10および5名の計25名（4年間で100名）の派遣を計画した。また、タイ国カセサート大学からは、それぞれの大学の派遣数と同数の学生を受け入れる計画であった。実際には、北海道大学、酪農学園大学および東京大学からなる日本側3大学からの派遣は97名、カセサート大学からの受入は93名であった。また、この間に日本からは延べ74名、タイからは延べ79名の教職員が相互に訪問し、プログラムの企画・運営に当たった。

**◆事業運営体制**

事業初年度は、事業運営体制の確立と各大学内および大学間でのカリキュラムおよび学生派遣及び受入に関する制度の準備にあてた。事業は、各大学の学内運営委員会および国内3大学での国内運営委員会を経て、カセサート大学を交えての評価企画会議において運営を行う体制とし、年に2～3回の国内運営委員会と年1回の評価企画会議を開催した。この会議を通して各大学のカリキュラムの編成、単位互換、派遣・受入日程および経費負担などの詳細を決定した。これらの会議を通して決定された事項は、最高意思決定の場とした国際運営委員会によって承認される体制をとった。国際運営委員会は、各大学の学部（あるいは学科）長およびプログラム運営責任者をメンバーとし、年2回（4月と1月）に定例、その他に必要に応じて臨時に開催した。

**◆単位互換**

単位互換はAIMSプログラムのスキームにしたがって、まず派遣先大学で単位認定およびグレード評価を受け、次いで予め決定した単位読替表にしたがって派遣元大学の単位に読み替える作業を行った。学生は、12週間の実習期間にAIMSプログラムのルールに従って12 UCTS単位を取得し、帰国後所属大学で8～12単位の単位認定を受けた。また、成績のグレード評価は各大学によって方式（例：優良可不可の4段階方式、A+、A、A-、…11段階方式など）が異なるため、派遣元のシステムにしたがって再評価を行い決定された。学生には、学生募集説明会および派遣前研修の機会を通じて単位読替の内容が説明され、派遣先大学での成績および最終評価成績が開示されている。

**◆提供された授業**

日本およびタイ国の獣医学教育では、いずれも国家資格取得のためカリキュラムが組まれており、本プログラムでは臨床実習を中心に単位互換を実施した。こうした中で、参加大学はそれぞれの大学が自らのカリキュラムを補完あるいは代替する内容となるように相手側大学と個別に協議しカリキュラムを決定した。日本とタイでは獣医学カリキュラムが異なっており、臨床実習を実施する学年を派遣対象とした本事業では、日本からは5年生、カセサート大学からは6年生が派遣されるプログラムとなった。

北海道大学は、カセサート大学において大動物（牛、馬、野生動物）を6週間、農場動物（豚、家禽、水棲動物）を6週間経験する実習とし、東京大学は小動物と大動物をそれぞれ6週間経験する実習とした。酪農学園大学は、5年次以降は専門コース選択制としておりそれぞれで卒業に必要な科目が異なる。このため、臨床系教室の学生は東京大学と同じメニューとしたが、非臨床系の学生向けには、カセサート大学がそれぞれの要件を満たすための科目新設あるいは実習内容の一部変更などを行い対応した。カセサート大学の臨床実習は、6年生を対象として、卒業後直ちに求められる臨床技術および知識を習得させる実践的な内容であり、牛、馬、野生動物、豚、家禽、水棲動物（魚、エビなど）の臨床および農場管理の実際を経験させる授業内容であった。

一方、カセサート大学学生には、東京大学では小動物の先端獣医療に特化したプログラム、北海道の2大学では大動物と小動物を交えたプログラムを提供した。とくに、北海道大学および酪農学園大学では20名の学生を10名ずつの2グループに分けて共同で受入れ、12週間の受入期間の中間点で入れ替える

受入体制とした。学生は、両方の大学の小動物臨床および先端的な基礎および応用獣医学教育を経験し、酪農学園大学では衛生学および大動物臨床、北海道大学では感染症および野生動物学などの特徴ある教育を受けた。酪農学園大学により提供された衛生学のプログラムでは、カセサート大学学生は大学内での座学、実習に加えて乳製品・食品加工および動物検疫の現場を訪問した。

◆学生へのサポート

学生の派遣および受入に際しては、各大学においてプログラム運営とともに学生をサポートする教職員、学生チューターおよび学生ボランティアのグループが編成された。派遣学生へのサポートは、留学に関する情報提供、各大学における英語およびタイ国事情の派遣前研修を行った。しかし、派遣初年度には、カセサート大学教員から派遣学生の専門用語を含む英語力およびコミュニケーション力について改善の必要性を指摘された。また、帰国した学生からも英語力の重要性が繰り返し語られたため、派遣2年目以降はそれぞれの大学で英語教員、学生サポート教員およびタイからの留学生を交えるなどして英語力およびコミュニケーションスキルの向上に取り組むとともに、学生の自学自習を促した。その結果、カセサート大学教員からの評価は改善され、併せてインタビューにより評価した派遣学生の授業理解度が向上した。また、派遣時、中間および実習終了時には各大学からサポート教員を派遣し、学生の生活および就学の支援を行った。カセサート大学では、国際交流担当の副学部長、補佐役の講師および2名の事務職員が配置されており、本事業についてもこの体制で受入をサポートした。多くの海外大学と交流を続けてきた経験から、学生受入には慣れており、派遣期間を通して学生のニーズに合わせた細やかなサポートが得られた。

一方、カセサート大学からの学生に対しては、各大学において教職員、学生チューターおよび学生ボランティアのグループが編成されて対応にあたった。本事業では、いずれの大学においても受入体制については試行錯誤を繰り返したが、最終年度には一定の形が整えられた。いずれの大学も、事業終了後もひきつづきカセサート大学との間で自主交換留学を進めることとしており、その決定の背景には本事業により得られた学生派遣および受入れに関する経験がある。

タイでは、AIMSの枠による交換留学の要件となっている政府による学生派遣の経済的支援がなされておらず、事業実施期間中に派遣されてきた学生数は奨学金の枠により決まっていた。

◆学生によるレポートおよび報告会

本事業では、派遣した学生に対して週毎の簡単な報告と帰国後の報告書提出を求めた。週毎の報告書は日本の事業担当教員が学生の就学および健康状態を把握する手段として有効であった。また、帰国後の報告書は、4大学全ての学生に提出を求め、冊子として印刷して各大学の教職員および国内の獣医系大学およびAIMS関係大学に配付した。また、PDFファイルを事業HPに掲載して公表した。

さらに、帰国後派遣学生による報告会を開催し、併せて事業担当教員によるプログラム紹介を行うことで、本事業に対する教職員の理解をふかめ、学生に対する本留学プログラムおよび海外留学への参加を促す場とした。

【本事業における交流学生数の計画と実績】

	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度		平成29年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
計画※	0人	0人	25人	25人	25人	25人	25人	25人	25人	25人	100人	100人
実績	0人	0人	26人	25人	20人	25人	24人	23人	27人	20人	97人	93人

※AIMSリスト掲載大学の変更に伴う計画の変更がある場合は、変更後の交流学生数を記載している。

**特筆すべき成果（グッドプラクティス）**【1ページ以内】

本プログラムでは、獣医学領域での臨床実習を日本人およびタイ人学生の少人数混成班で実施する手法を試みた。カセサート大学に派遣した日本人学生の多くは、知識を有するが英語での説明および討論は苦手であり、実習開始直後はタイ人学生のサポートに頼る姿勢が強く見られたが、3ヶ月間の実習が終了する頃には、タイ人学生と対等に英語での議論ができるまでに成長した。一方、タイ人学生は、より多くの時間を基礎獣医学に割くカリキュラムのおかげで、自分たちに比べて獣医学の広い領域をより深く理解していると感じており、獣医学をより深く学ぼうという意識が高まっている。また、3ヶ月間に同一グループの学生と連日長時間の実習を共に過ごし、極めて密な交流をもつことから、帰国後もその関係が持続している。これらの学生の変化は、プログラム開始時に意図した少人数の混成班での実習によって得られる気づきと変化であり、プログラムの目的であるアジア地域の獣医学のレベルアップと、2国間の獣医学生の相互理解に基づき国際共同活動を牽引できる獣医師への成長を意味するものである。

日本での臨床実習においても、日本人学生との混成班で実習を行ったタイ人学生は、タイ人学生のみで実習を行った場合に比べ理解度および成長に違いがみられ、インタビューでも実習に対する満足度が高いという結果であった。日本人学生にとっても、診療内容を英語で解説することにより自らの知識および理解度を確認することができるため、臨床実習の効果が高くなる。